連載：読書のすすめ (第 16 回)

今回の巻頭インタビューは，東京大学先端科学技術センター教授の西成活裕先生でした。さて読書の秋に贈る今年の「読書のすすめ」です。

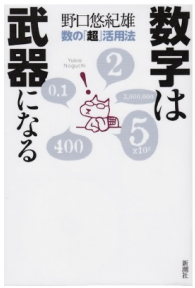
「誤解学」
(新潮選書，西成活祐 著，2014)

西成先生の「渋滞学」「無駄学」に続く本になります。誤解は，世の中のほとんどのトラブルの原因の一つになっていると言えるほど，私たちの生活に大きな影響を及ぼしています。誤解は完全に防ぐことはできません。皆さんも誤解が原因で悩んでしまった経験がないでしょうか。さらに，誤解は国家間の戦争にまで発展することもあります。なぜ誤解は起こるのでしょうか。本書は誤解をモデル化して理論的に考え，誤解の予防法や対処法について考えています。また，身近な事例や著者の経験も豊富に書かれており，楽しく読むことができます。誤解を解きたい人や誤解に苦しんでいる人はきっかけがみつかるかもしれません。

「ナンバーセンス ビッグデータの嘘を見抜く「統計リテラシー」の身につけ方」
(CCC メディアハウス，カイザー・ファング 著，矢羽野 薫 訳，2015)

「ビッグデータ」という言葉が定着し，多くの人が数字と統計に興味を持つようになってきました。数学 I でも「データの分析」が入り，統計の重要性も高まってきました。現在，多くのデータを扱えるようになりましたが，それをどのように分析し，活用していくかについては議論が必要でしょう。本書では，様々なデータや数字を正しく扱い，できるだけ真実に近い分析を目指すための統計リテラシー「ナンバーセンス」の必要性について書かれています。日常生活で経験する身近な題材を取り上げ，その誤ったデータ分析やごまかしの数字の実例が挙げられています。「ナンバーセンス」のある人は数字を鵜呑みにしません。データの使い方や解釈の仕方で，誤った結論を出してしまうこともあります。そのためにも，普段から数字に対する感覚を養っていくことも大切だと思われます。米国の大学ランキングの裏側の話やグルーポンの利用は店に利益をもたらしているかなど面白い話があります。他にも肥満の話や失業率，物価についてなど，興味ある分野だけでも読んでみてはいかがでしょうか。

「数字は武器になる：数の「超」活用法」
(新潮社，野口悠紀雄 著，2014)



本書の見返しには「『数字を使うのは，理系の仕事』ではない。『文系の仕事』にこそ数字が必要だ！」という文が書かれています。この文をもとに本書では，複雑な数式を使うことなく，数字を用いて説明や説得する重要性や効用性が述べられています。数字を用いれば，イメージがはっきりするし，問題を正確に捉えることができます。主張や説得の際に数字を用いれば，「出まかせを言っているのではない。」と示せます。対象を理解する際にも，数字で捉えることは重要です。矛盾しているかどうかは，数字にはっきり表れます。数字を使えばごまかしやトリックを簡単に仕掛けることができます。数字を鵜呑みにするのではなく，数字の成り立ちを理解することが重要です。本書では，政治，経済，歴史まで様々な事例が挙げられ，野口先生の幅広い知識が感じられ，また独自の視点もあって興味深く読むことができます。また，各章ごとに Funny?というジョークのページがあって，楽しいものになっています。

「数学ミステリーの冒険」
(SB クリエイティブ，イアン・スチュアート 著，水谷 淳 訳，2015)

イアン・スチュアートの数学小ネタ集第 3 弾です。ちょっとした数学パズル，数学者のこぼれ話，楽しい数学の話題，自然界や日常生活に姿を表す面白い数学がたくさんあります。数学にはミステリーがたくさん。それを解くには，数学への興味と鋭い考察が必要で，有名探偵そっくりな名前の 2 人が数学的難事件に挑みます。どのコラムも短いし，難しい話は出てこないので，気楽に読み進めることができます。授業のネタとして活用できるものもあると思います。

【編集委員会】